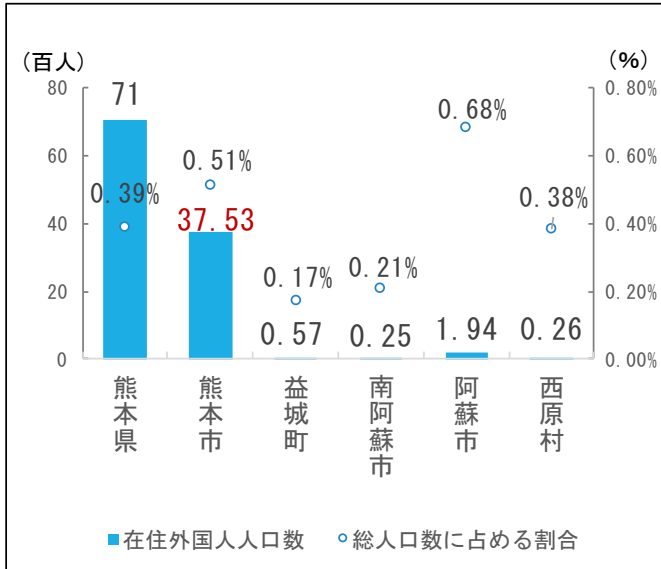


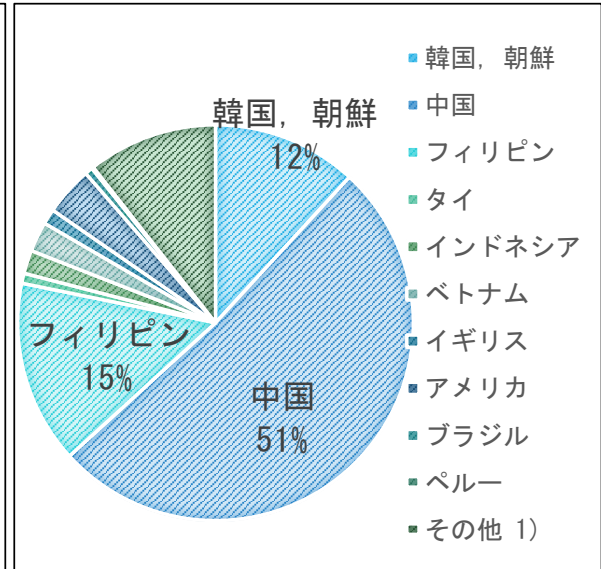
調査背景・目的

- 東日本大震災では、
外国人が特定の避難所に集中し、支障が生じた。
- この教訓をふまえ、
熊本地震における外国人の避難の実態を把握し、
外国人の行動の多様性とニーズを明らかにする。

1. 在住外国人人口の概要



熊本県と各市町村の外国人人口数と割合

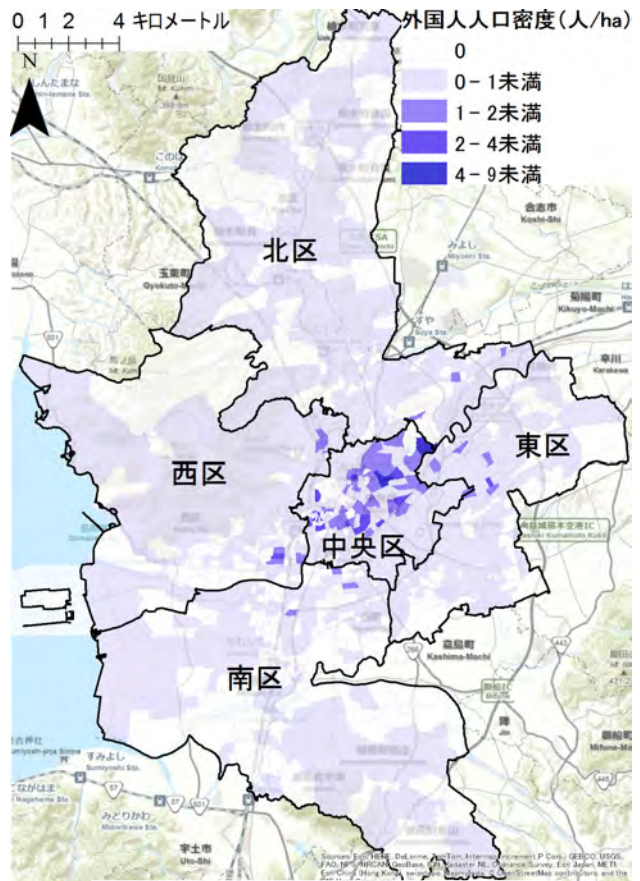


熊本県国籍別の外国人人口割合

(2010年国勢調査の結果に基づき作成)

1. 外国人人口分布

- 外国人は大学・学生寮等の周辺に多い。
(2010年国勢調査の結果より)
- 外国人集住地域で震度7を観測した。
(4月16日AM1:25本震)



熊本市の外国人人口分布

(2010年国勢調査の結果に基づき作成)

2. 留学生へのヒアリング調査

- 調査概要
 - ・実施時間：2016年6月6日AM
 - ・実施場所：熊本県内の大学
 - ・調査担当：楊梓、稲垣景子、松行美帆子
- 調査項目：個人属性／地震後の行動／現在、困っていること
- 調査対象：5人（男性）

項目	内容（人数）
学年	学部(1)、修士(2)、博士(2)
出身地	東アジア(1)、東南アジア(1)、中近東(3)
滞在時間	3年以内(5)
本調査で用いた言語	英語(4)、日本語(1)
居住	学生寮(1)、大学近くのアパート(4)
居住形態	一人暮らし(3)、家族と同居(2)
被災経験	母国で地震を感じたことはあるが被害なし(5)

※調査対象者数は限られており、代表性を確保できるサンプリング方法を採用していない。

2. 留学生へのヒアリング調査

- 自宅の被害状況：
 - ・全壊・半壊なし。約半数が家具の転倒や小さいヒビを確認。
 - ・ライフラインは前震後はほぼ停止せず、本震後はほぼ停止。電力はすぐ復旧したが、しばらく断水が継続。
- 避難行動：
 - ・指定避難所に避難した（国籍毎に集まる傾向）。
 - ・避難所でボランティア活動をした学生もいる。
 - ・その後、博多・北九州等へ避難し、GW後半に熊本に戻った。
- 情報の取得方法：
 - ・災害情報は友人や携帯から入手。
 - ・指定避難所を知らなかった人は、地震発生後、日本人の友人に教えてもらった／人の流れについて行った／教会の近くに中学校があることを思い出した→指定避難所にたどり着いた。
- 現在の状況：
 - ・困っていることを抱える学生は少ない→地震によるストレスを感じ、不安感を持つ学生もいる。

3. 熊本市国際交流会館

熊本市地域防災計画書に基づき外国人避難対応施設を開設

- 開設期間：4月15～30日（16日4時から24時間連続運営）
- 1階玄関ロビーおよび2階交流ラウンジを利用。
- 本震後、外国人被災者（観光客を含む）約80名が避難。観光客は一刻も早く熊本を離れることを希望し、会館側でタクシー等を手配。16日夜の外国人被災宿泊者は38人。
- 離乳食、ミルク、生理用品、毛布、食料等物資が不足し、当初自治体から配給が届かず、会館側ではネットで支援を呼びかけた。数日後から自治体の物資支給が始まり、会館職員が配給基地まで取りに行った。

熊本市国際交流振興事業団（八木浩光事務局長）へのヒアリングに基づく

3. 他の避難施設

- 今回訪れた拠点避難所等※に外国人はいなかった。
（6月5日時点）
- 地震直後、外国人がいた避難所もある。
- 他の避難所には現在も外国人がいる。
- り災証明書の発行会場に来た外国人は、日本語があまりできず、国際交流会館を紹介した。

→外国人へのサポートはまだ必要

まとめ

今回の調査では、

- ◆留学生は大学や大学近くの指定避難所に避難した。
- ◆外国人が集まりやすい施設（教会、国際交流会館など）も避難所として機能した。

また、

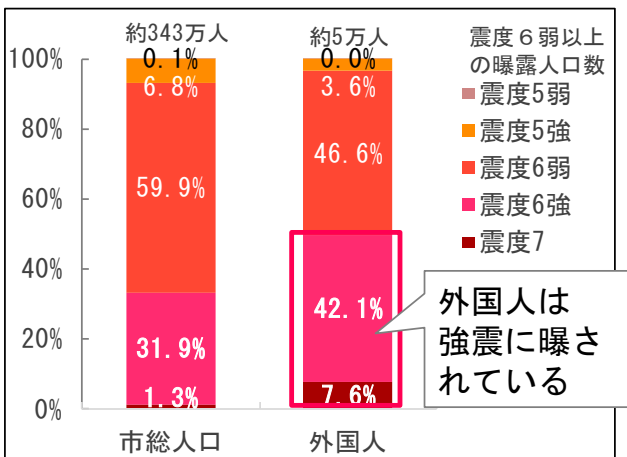
- ◆避難所での短期滞在後、遠隔地へ避難した外国人も多い。（多様な避難行動）
- ◆避難所運営に協力した外国人もいる。

ただし、今回ヒアリング調査に協力いただいた留学生の数は少なく、全体像を捉えるためには追加調査が必要である。

横浜において…

▶外国人が多く暮らす地域と日常的に利用されている施設を事前に把握する必要がある

→災害曝露人口の分布を把握した



元禄型関東地震の想定震度曝露人口と割合

→今後、外国人が日常的に集まる施設を整理する

